様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：３４３０４
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ１８４４７

研究課題名（和文）森蘊の業績と日本庭園史の作成―歴史的庭園のデータベース作成

研究課題名（英文）The achievments of Mori Osamu and the compilation of Japanese garden history-Database for Japanese garden history

研究代表者
ＭＡＲＥＳ　Ｅｍｍａｎｕｅｌ（MARES, Emmanuel）

京都産業大学・文化学部・准教授

研究者番号：９０７９１１２９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、日本庭園史家であり、また作庭家でもあった森蘊(もり・おさむ、1905-1988)の業績を再評価すると同時に、昭和期の日本庭園史学の構築を再考することであった。最終年度となる2019年度は、これまでの研究成果をまとめ、様々な媒体で発表した。
（１）奈良文化財研究所に保管されている森蘊の資料を整理し、公開した。（２）学会発表の内容を学会誌や研究書などに掲載した。（３）研究会を開いて「昭和の作庭記」という研究成果報告書を出版した。（４）現地調査や聞き取り調査を撮影し、記録映像を作成した。（５）それらの成果物を広く紹介するように、ホームページを立ち上げた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の成果は複数の媒体や言語で広く発表した。
（１）学会誌や研究書に投稿し、また「研究成果報告書」をまとめることによって、専門家向けに情報を発信した。（２）紙媒体で表現できないことを伝えるために記録映像も作成した。その映像は今後も一般向けに上映する予定である。（３）「森蘊旧蔵資料」や「森蘊」というホームページを作成し、研究の成果をわかりやすく、一般向けに公開した。（４）最後に、英語でも研究成果を発表することによって、海外における日本庭園への理解を深める一助となることが期待される。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to reconsider the elaboration of Japanese garden history during the Showa Period (1926-1989) through the analysis of the work of Mori Osamu (1905-1988), a Japanese garden historian and landscape architect. During the last year of this grant-study, we used different media to present the results of this research.
(1) We organized and release the archive of Mori Osamu stored at the Nara Institute for Cultural Properties. (2) We published articles in academic journals and contributed to research book. (3) We published the proceedings of the conference we organized in 2018. (4) We realized a documentary based on our field study. (5) We created a homepage to present widely and facilitate the access to the results of this research.

研究分野：日本建築史・日本庭園史

キーワード：日本庭園史　森蘊　昭和期

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

2005 年以降、日本庭園史の研究家であり、また作庭家でもあった重森三玲（しげもり・みれい、1896-1975）の業績が脚光を浴びるようになった。生前は批判も多かったようだが、今になっては昭和期を代表する作庭家として紹介され、多くの本や雑誌などが取り上げている。日本語のみならず、英語の本も出版されるほど、重森三玲の人気は国内外に及ぶ。彼が作った庭もまた観光地として賑わい、文化財にも登録・指定されつつある。それに対して、森蘊の業績はこれまで見落とされてきた。専門家の間では学者として高く評価されているが、作庭家として認識されておらず、その集大成が未だにされていない。

森蘊は『平安時代庭園の研究』、『中世庭園文化史』、『桂離宮』、『修学院離宮』、『小堀遠州の作事』、『日本の庭園』など、古代から近代まで体系的に日本庭園の歴史を探り、多数の著書を書きあげ、現代の日本庭園史の基盤を築いた人である。文献資料に基づくだけではなく、歴史的な庭の実測・発掘・復元整備に直接関わり、その成果を考慮に入れたことが森の研究の特異性と革新性であった。例えば、京都の法金剛院庭園と浄瑠璃寺庭園、奈良の円成寺庭園と大乗院庭園遺跡、平泉の観自在王院跡と毛越寺庭園など、今では国の特別史跡や特別名勝、世界遺産にも登録されている各地の文化財の保護に尽力した。

森蘊の遺族より奈良文化財研究所に寄贈された資料が保管されているが、それらはいまだに整理も、公開もされたことがない。その資料というのは、手書きや青焼きの図面、スケッチ、レベルブック、原稿、書簡、メモ、写真、ネガ、冊子、雑誌など、数も多く、また内容も多種多様であるので、その整理が緊急の課題である。

また、森が 40 年ほど前に修復した文化財庭園は再整備の時期を迎えている。実際に、京都の浄瑠璃寺庭園や平泉の毛越寺庭園などでは新たな発掘と整備事業がすでに実行されている。森が文化財庭園に及ぼした影響と、将来的の保護指針を再考する好機である。

さらに、森の作庭活動はこれまで研究の対象になったことがない。歴史家の仕事の傍であったが、森は社寺、個人宅、ホテル、公園など、全国で 70 庭以上を作った。庭園史の研究は新たな庭のための発想源であったが、作庭現場での経験は文化財の復元整備に役立ったというように、森の業績を理解しようと思えば、その作庭活動の把握と分析が必然不可欠であると思われる。

２．研究の目的

本研究の目的は、日本庭園史家であり、また作庭家でもあった森蘊(もり・おさむ、1905-1988)の業績を再評価し、昭和期の日本庭園史学の構築を再考することである。

森蘊は現代の日本庭園史の基盤を築いた人であり、我々の庭の見方に大きな影響を与えた歴史家である。一方でよく知られていないが、森は寺院や個人庭園の作庭にも力を注いだ作庭家でもある。森蘊のその両側面に光を当て、その意味と射程を明らかにし、昭和期の日本庭園史の構築を再考することがの本研究の第 1 の目的である。第 2 の目的は、森蘊が残した多くの資料を整理し、公開できるようにデータベース化を進めることである。

３．研究の方法

本研究の目的である、森蘊の業績を明らかにするために、まずは現地調査と関係者の聞き取り調査を行なう必要がる。森蘊に直接関わった庭園の研究者や作庭家、または森蘊が作った庭園の所有者などにインタビューを行ない、録音と録画を行なう。

それから、奈良文化財研究所に保管されている森蘊の多くの資料の整理を行ない、データベース化を進め、公開できるようにする。

さらに、森蘊の業績の実態を明らかにするために研究会を企画し、庭園史、建築史、考古学などの異なった観点から議論をする。

４．研究成果

最終年度となる 2019 年度は、これまでの研究成果をまとめ、様々な媒体で発表した。

（１）　奈良文化財研究所に保管されている森蘊の資料を整理し、公開した。「森蘊 旧蔵資料」のリストは 1-1 から 42-31 までで 994 項目を数え、整理の便宜上に「図面」「原稿」「写真」「ほか」と４種別に分類した。現在は、奈良文化財研究所の遺跡整備研究室が管理し、図書資料室に保管されている。（https://www.nabunken.go.jp/research/moriosamu.html）。

（２）　現地調査と聞き取り調査に基づいて、記録映像を作った。森蘊のもとで働いていた庭師のインタビューをまとめたビデオで、2019 年 7 月 20 日に文化財庭園保存 技術者協議会総会・研修会、2019 年 10 月 6 日に名勝大乗院庭園文化館事業 第 7 回庭園研究講座で上映した。

（３）　2017 年度と 2018 年度に発表した内容をまとめて、書籍や学会誌に論文を掲載した。日本語では、「歴史的な庭園の復元 ― 森蘊の「復原的研究」を通して」海 野聡(編) 『文化遺産と〈復元学〉』吉川弘文館(165- 208 頁)があり、英語では、The Bridge: Iconic

symbol of Japanese Gardens Inside and Outside Japan. The Journal of the North American Japanese Garden Association, No.6, 15-21. 2019がある。

（4） 2018 年 8 月 18 日に開催した研究会の内容に基づいて、「森蘊研究成果報告書」を作った。その中には、研究会の内容のほかに、現地調査で行なったインタ ビューや精密な年表をまとめた。

（5） 最後には、それらの成果物を広く紹介するように、ホームページを立ち上げた(https://www.mori-osamu.com/)。誰もが無料でいつでもアクセスできるホー ムページなので、森蘊に関する情報をわかりやすく提供している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 エマニュエル・マレス	４．巻 1
２．論文標題 庭の柵を飛び越えて：内と外を繋ぐもの	５．発行年 2019年
３．雑誌名 国際シンポジウム報告「都市景観をグリーンインフラから考えるー金沢市における活用と協働ー	６．最初と最後の頁 38-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 MARES Emmanuel	４．巻 No.6
２．論文標題 The Bridge: Iconic symbol of Japanese Gardens Inside and Outside Japan	５．発行年 2019年
３．雑誌名 The Journal of the North American Japanese Garden Association	６．最初と最後の頁 15-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　5件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 エマニュエル・マレス
２．発表標題 庭の柵を飛び越えて　内と外を繋ぐもの
３．学会等名 都市景観をグリーンインフラから考えるー金沢における活用と協働―（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 エマニュエル・マレス
２．発表標題 浄瑠璃寺と円成寺の庭園ー森蘊による庭園の復原的研究ー
３．学会等名 木津川市ふれあい文化講座（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Emmanuel MARES
２．発表標題 The Bridge : Iconic symbol of Japanese Gardens
３．学会等名 JAPAN'S GIFT TO THE WORLD : JAPANESE GARDENS AS A GLOBAL PHENOMENON（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 エマニュエル・マレス
２．発表標題 日本庭園における反橋の色付け
３．学会等名 古材文化の会の研究会にて（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 エマニュエル・マレス
２．発表標題 重森三玲と森蘊の庭園観
３．学会等名 庭園―その歴史と美意識をよみ解く（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 エマニュエル・マレス
２．発表標題 歴史的な庭園の復元その歩みと課題
３．学会等名 復元学の意義と課題（招待講演）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計3件

1．著者名 菊池直樹、上野裕介、エマニュエル・マレス等	4．発行年 2019年
2．出版社 公人の友社	5．総ページ数 125
3．書名 グリーンインフラによる都市景観の創造　金沢からの「問い」	

1．著者名 海野聡(編)、児島大輔、マルティネス・アレハンドロ、加藤悠希、青柳憲昌、マレス・エマニュエル、 川本悠紀子、高田和徳、田中弘志、前川歩(著)	4．発行年 2019年
2．出版社 吉川弘文館	5．総ページ数 344
3．書名 文化遺産と〈復元学〉	

1．著者名 マレス・エマニュエル(編著)、粟野隆、飛田範夫、高橋知奈津、田中栄治(著)	4．発行年 2020年
2．出版社 綴水社	5．総ページ数 238
3．書名 森蘊研究成果報告書 昭和の作庭記ー森蘊の業績と日本庭園史の作成	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考